The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	関西グローバルヘルスの集い オンラインセミナー第5弾 「わたしたちの地球、わたしたちの健康」 第1回：プラネタリーヘルスという新たな視座
Author(s)	藤井, まい
Citation	目で見るWHO. 2022, 82, p. 30-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89922
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

関西グローバルヘルスの集い オンラインセミナー第5弾「わたしたちの地球、わたしたちの健康」第1回：プラネタリーヘルスという新たな視座

アジア欧州財団副ダイレクター
藤井　まい

保健師。保健所、WHO、JICA専門家を経て現職。感染症緊急事態準備即応コーディネーターとしてアジアと欧州50か国余りを対象に医療物資配布事業に従事。

2022年6月2日（木）、第20回関西グローバルヘルスの集いでは、「プラネタリーヘルスという新たな視座」と題するオンラインセミナーを開催しました。第5弾「わたしたちの地球、わたしたちの健康」の3回シリーズの初回です。ファシリテーターは小笠原理恵さん（大阪大学）、話題提供者には中村安秀さん（日本WHO協会）、河野茂さん（長崎大学 学長）をお迎えしました。事前登録者は300人を超え、見逃し配信でも多くの方にご視聴頂きました。

河野さんは、長崎大学がプラネタリーヘルスに貢献するため10学部の分野や領域を超えた多面的、横断的な活動を開始したことについて下記のようにご紹介下さいました（図1）。

プラネタリーヘルスを着想したきっかけ

大学の研究力評価で、研究インパクトを増やす必要性があり分野横断研究が進んでいないことがわかりました。これでは複雑化、多様化する地球の健康を守るために必要な知の連鎖は生まれてこないと思い、様々な立場から意識、行動変容を促すためのアクションプランを示しました。私が目指す「プラネタリーヘルス」とは、人類を含めた多様な生物が生命を維持できる自然環境を有し、地球上で人類が地球の健康を守るための有機的な活動ができる状態を指します。

プラネタリーヘルスに貢献する長崎大学の取り組み

多岐に渡る活動を展開しています。一例として、唾液によるPCR検査、RNA抽出の自動化装置の開発を行っています。また、異分野の研究者が連携できるプラットフォームを作成、共創グラントで優れた分野横断研究に研究費を出し、掲示板を通じて研究者が繋がっています。昨年度から全学部生対象のプラネタリーヘルス入門を教養必修としました。各学部講師陣の監訳で教科書も出来ました。2022年10月から長崎大学プラネタリーヘルス学環を立ち上げる予定です。地球規模の課題に各分野の専門家が学問領域を超えて取り組み実務家リーダーを養成する全学的組織です。今後も挑戦を続けて行きます。

図1　長崎大学の取り組み（河野さんの発表スライドから）

中村さんは「WHO憲章からプライマリヘルスケア（PHC）そしてプラネタリーヘルス」として、PHCの理念の多くがSDGsに引き継がれていることをご紹介下さいました。持続可能な開発のための2030アジェンダ（2015）や、ウェルビーイングのためのジュネーブ憲章（2021）の概要に加え、人類だけが対象の保健医療は限界で地球上の生き物すべての健康に配慮し、ヒトの健康を考える視点が必要不可欠であることをお伝えくださいました。プラネタリーヘルスは既存の枠を超えた行動に向かう新しい科学であり、サンパウロ宣言（2021）の概要だけでなく、現場からの声を参照に、必然的に、プラネタリーヘルスの取り組みはオーダーメイドになるとして、「世界の多くの村では、プラネタリーヘルスは決して新しい概念ではない。日本にも古くから鎮守の森、入会地、里山などの形で、人びとが暮らしを守りつつ、自然の恵みを次世代に伝えてきた伝統がある」という部分が大変印象的でした。

ミニパネルディスカッションでは、自然と共存しながら暮らしてきた地域ではプラネタリーヘルスの概念が既に根付いていることもあること、プラネタリーヘルスの中にはいくつもの相反する概念が多彩に入り混じっていることなどが話されました。全生物の多様性を根本から見つめなおし地球の健康について考える、それは決して新しい概念ではなく、大学全体として取り組んでいるところもあることを学べた貴重な時間となりました。